



分離壁と入植地

パレスチナ巡礼⑤

二十年ぶりのパレスチナ。イスラエルが分離壁の建設を始めたのはこの目で「分離壁」と呼ばれるものを見ることだった。二〇〇二年からである。イスラエルは「ヨルダン川西岸のパレスチナ自治区からの攻撃を防ぎ、イスラエル市



東エルサレムの分離壁(パレスチナ側から写す)

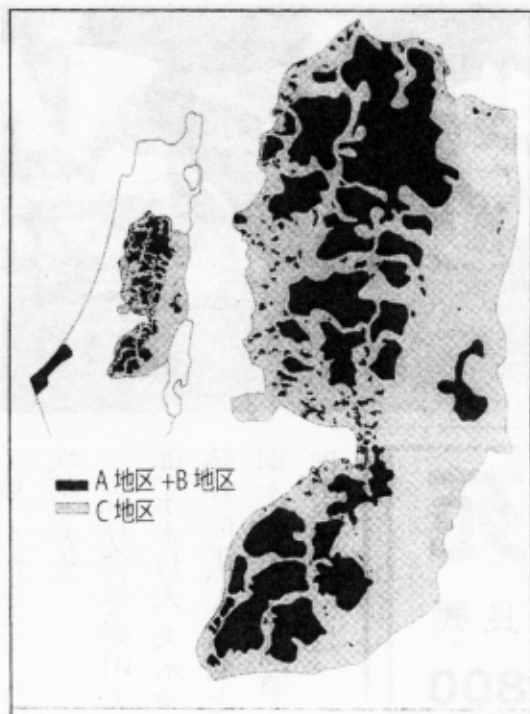
民を守るため」という口実のもと、高さ八メートルのコンクリートの壁を築き続けている。写真はイスラエルが不当に占領・併合した東エルサレムの分離壁だが、壁の前に立つと想像以上に威圧的であり、完全にイスラエルとパレスチナを遮断している。

長くパレスチナ支援活動にかかわる娘が言う。「国連が一九四七年に可決・決議したイスラエルとパレスチナの分割線に分離壁が建設されているのなら、不当な行為ではあるが譲れるかもしれない。しかし、分離壁は国連の示した境界線を見れば、大きくパレスチナ側に入り込んで建設されている。パレスチナ側のテロ攻撃を防ぐためではなく、強引にイスラエルの領土を拡大させている」と。

私はヨルダン川西岸のパレスチナ自治区は独立が承認された場合、パレスチナの領土になるものだと思います。飛び地のガザ地区はパレスチナの領土となるが、西岸地区は違い、A地区、B地区、C地区に分けられている。

A地区は行政権と警察権を持つパレスチナの完全自治区であるが、それは西岸地区全体のわずか七%に過ぎない。B地区は行政権はパレスチナ側にあるが警察権はイスラエル側が持ち、全体の二四%を占める。地区全体の約六割を占めるC地区は行政権も警察権もイスラエルが持ち、到底自治区と呼べるものではない。このC地区には今もイスラエル側が入植地が建設されているのだ。イスラエルは入植者を守るために電流フェンスや有刺鉄線で囲んでおり、この分離壁がパレスチナ

ヨルダン川西岸地区のうち、黒い部分がパレスチナが行政権を持つ地区



住民の住む地域を分断しているのである。国連など国際社会はこのような不当な分離壁の建設を止めるよう抗議しているが、イスラエル側は無視し、壁は東京から岡山に至るまでの長さになるとい

パレスチナの人々は泣き寝入りしているのだ。今回、娘と妻との三人旅、パレスチナ内はタクシーで移動したが、娘が仕事で時々利用する運転手さんで、親切にいろいろ説明してくれた。「分離壁やイスラエルの入植地は皆さんが想像される以上にパレスチナの人たちの自由を奪い、今まで簡単にいった所も、イスラエル側が検問所でチェックし、さらに大きく迂回しなくてはならない」と嘆いていた。パレスチナ問題は何も解決していないと改めて実感したのである。